



特選 梯子乗り出初の空を裏返す

正法寺町 高井 豊

(評) 新年の初めに消防職員や消防団員が集まって様々な消防演習を行う出初め式には消防の放水や梯子乗りが行われます。「空を裏返す」から梯子乗りの技の鮮やかさや緊張感、注目する人の姿が伝わってきます。(幸司)

入選 傾きし売地の札や草いきれ

稲里町 藤野 千枝子

(評) 烈日に灼かれた夏の日盛りと繁茂した草。その中に「売地」と書いた看板。売地の文字もかすれ朽ちて傾いている看板。売れないままの夏草に覆われている土地の様子が印象に残る作品です。(幸司)

入選 蟬時雨抜け出て空のがらんど

東近江市 小泉 壽幸

(評) みんなん蝉のミンミン、油蟬のジジジジ、熊蟬のシャーシャーなど、蟬が一齐に鳴いて賑やかな状態を抜けた時の気が伝わってきます。「がらんど」という表現でスケールの大きさを感しました。(幸司)

特選 夕焼を持ち上げており湖力

稲枝町 谷口 清香

(評) 母なる琵琶湖が夕焼ける風景の句はたくさん詠まれているが、この句には、今までにない清新さと魅力がある。夕焼けの素晴らしさと水面に煌く様を「持ち上げており」と捉え、「湖力」と表現した感覚は心象風景で鋭い。作者の希いまでも読みとれる句である。(治夫)

入選 梅雨晴間うしろ歩きのお母の笛

下西川町 古川 たけ

(評) 園児の散歩の時間でしょうか。互いに手をつなぎ、楽しそうにゆるやかな歩みをする園児を見守っているお母さんの顔の表情や動作や歩き方などを、後ろ歩きと笛から想像を楽しみました。(幸司)

特選 屋形舟舳先に分ける花の屑

日夏町 寺村 澄子

(評) 彦根城の濠にも屋形舟が運行している。満開の桜の枝を潜り行くのもよし、落花の埋め尽くした濠を行くのも又、情緒に溢れていて良いものである。屋形舟と花屑が一枚の絵を見る如く、旨く詠まれている。(栄子)

入選 空蝉や生命の重さ確と知る

東近江市 小林 清次郎

(評) 地下で幼虫として地上に這い出して来て、背を割り皮を脱ぐ蝉。「空蝉」とは、この世に生きる人間の意味を持つとか。蝉の脱け殻は、ひとつの生の終わりなのか始まりなのか。命の重さを感じる捉え方に共感しました。(幸司)

入選 弓始め鼓動静まる時を待つ

稲里町 田辺好子

(評) 弓道から始まる事始めの緊張感。新年は特別な感慨がある。「鼓動静まる時」のことばには、経験、ときめきなど、さまざまな思いが交錯するなかでの集中力、精神統一。静から動への寸時を巧みに捉えている。身も心も清新。(治 夫)

入選 山笑ふ千貫の井をふところに

馬場二丁目 清水はる

(評) 蕩々と自噴している様な、価値のある井戸なのであろう。「千貫の井」と、最上級に井戸を表現している所に惹かれる。季題も付きすぎず、春の野山の大らかさが感じられる。(栄 子)

入選 ランドセル背なに馴染みて若葉風

大藪町 是沢卓

(評) 作者の着眼が素晴らしい。子どもの成長のめざましさが「背なに馴染みて」のことばに込められている。四月、ピカピカの大きなランドセルを背負って重そうに歩いていた一年生。もう今では、たくましく成長、元氣いっぱい通学している姿に安心と驚きの作者。「若葉風」の季語が効いており、生きて働いている。(治 夫)

入選 船遊知己のごとくに手を振られ

高宮町 細田惠貢子

(評) 誰もが船に乗れば、エールの交換の様に見知らぬ人に手を振ってしまう。旅の開放感からなのか、手を振る方も振られる方も思わず笑顔になる旅の情景である。(栄 子)

入選 みがかれしミラーが写す新入生

本庄町 田口洋子

(評) 新鮮な視点、巧みな表現。「みがかれし」と「新入生」の呼応の中に、すがすがしさと、さまざまな想像が浮かぶ句である。作者は、子どもの登校のとき、道角に立ち、毎日子どもを見守っておられるのだろうか。カーブミラーを磨かれたのも作者だろうか。すがすがしいまなざしも感じられる。(治 夫)

入選 向き合ふて二人の夕餉日脚伸ぶ

芹橋二丁目 秋山栄子

(評) 余分な事は何ひとつ言っていないくても、人生の年輪が感じられる気がする。心の通いあう夫婦の充実感に溢れる日常が、十二分に伝わって来る。季題の選択もよい。(栄 子)

入選 池の鯉かざす日傘の中に入る

西今町 秋口大門

(評) 炎天下の真夏日が浮かぶ。この暑さには、池の鯉も困惑しているのだろう。広い池、太陽の光の照り返し、木陰も無いのだろう。かわいそうな鯉の様子、日傘をかざしてあげる作者の心情。そこへ入ってくる鯉の様子が目に浮かぶ。鯉と人との交流風景と心情を巧みに表現。(治 夫)

入選 整はぬ湖国駆け抜け春一番

小泉町 菅生鈴子

(評) 春一番は、春らしいイメージよりも荒れると言う印象の方が強いが「春だよ！」と声高に触れているようだ。春一番と言う言葉の響きも良く、今はまだ整っていないくても、本格的な春の訪れが感じられる。(栄 子)

佳作 山笑ふ歩数の増えし万歩計

鳥居本町 寺村美恵

佳作 古き家の門はづし松手入

米原市 伊部正子

佳作 啓蟄や土の目覚めを鋏で知る

米原市 西尾辰之

佳作 新緑や万のいのちの煌ける

高宮町 前川菅子

佳作 宇曾川の水逆上る春疾風

平田町 樋水カツ子

佳作 腰痛の我には遠し花の城

東沼波町 石井浪栄

佳作 梅林を抜けて見あぐる古城かな

愛知郡愛荘町 中村慶子

佳作 鯨の金の耀ふ梅日和

佐和町 大久保豊子

佳作 ひらひらり静ごころもて山桜

犬上郡多賀町 東岸隆

佳作 苗札の一字は土の中に在り

原町 森ふみ子

佳作 蓄へし力を色にも芽出づ

城町二丁目 福原芳江

佳作 寄りそうて暮らす集落花大根

西今町 前田弘子

佳作 乳母車降ろしよちよち下萌ゆる

稲枝町 山本正雄

佳作 初夢に思はぬ人が逢ひに来て

地藏町 佐古徳子

佳作 落款の座を占め落の臺開く

稲里町 野瀬善一

佳作 目深に学帽の行く新入生

長浜市 近藤甚一郎

佳作 来る鷺に刈田の広さ譲りたる

甘呂町 日和田 喜美子

佳作 天空に浮かぶ金亀の花の城

長浜市 勝木 岩松

佳作 棚経や僧の話も短かめに

松原町 中島 房女

佳作 梅の香を乗せ晩鐘の響き来る

外 町 筑田 とよ子

佳作 燕来る廂の深き城下町

西今町 小沢 三男

佳作 米寿とて自足を目差し耕せり

日夏町 寺村 房子

佳作 妖精が飛び跳ねるよな大銀河

八坂町 飯島 潤

佳作 頓挫せしダムの建設枯尾花

米原市 成宮 義雄

佳作 不器用に生きる二人や桜咲く

長浜市 藤居 睦美

佳作 指の腹ほぐしほぐして種をまく

古沢町 大橋 しず

佳作 捨て舟に早春の風軋みける

松原一丁目 金澤 湖青

佳作 春の土踏みて子牛の売られ行く

高宮町 西河 琴

佳作 爺さんの胡座の中に春の猫

極楽寺町 古川 寛二

佳作 落椿そっぽ向きつつ寄り添いぬ

東近江市 坂口 靖子

佳作 子との距離近くて遠し夜の秋

米原市 日比 陽子

佳作 螢火の草の中より水の音

東近江市 松本 ちずる

佳作 八十路とて若き日のあり桃の酒

下稲葉町 上田 タツ子

佳作 沈丁の白き風入れ老ふたり

城町三丁目 児玉 富江

佳作 明け放す家に吹き込む青田風

東近江市 藤本 修

佳作 とり分けるサラダ鮮やか蟬しぐれ

池州町 戸田 雅子

佳作 万緑の香を吸う胸の生き返る

後三条町 田中 ふみ

佳作 こぼれ萩残香に揺れる札所寺

後三条町 秋山 正子

佳作 梅雨寒に一枚増える旅支度

本町一丁目 多田 和代

佳作 校庭の乙女の像に落花舞ふ

清崎町 村田 惇一

佳作 聳え立つ天守一望春の色

奈良県生駒市 北川 久子

佳作 南北に湖国を分けし初しぐれ

東近江市 福澤 啓一

佳作 花吹雪受けゆっくりと車椅子

本町一丁目 中島 暉枝

佳作 夢一字込めたる未来卒業す

外 町 知田 照子



《総評》

応募数三二六句で、俳句の全盛時代からみると、随分減ってきてしまったが、きらりと光る個性的なものや、燻し銀の様に渋く味わい深い句が見受けられた。良い句が沢山あると選句が捗り、句の方から選者の懐へ飛び込んで来るかの様に思える。今回も力作揃いだったが欲を言えば、もう少し沢山の応募があればと思う。沢山の中で切磋琢磨、腕をみがくのも大切である。来年は躊躇している句仲間を、是非ともお誘い戴きたいと思う。彦根には、まだまだ隠れた俳人が居られるので、表舞台での活躍を切に期待するものである。

北川 栄子

を念じています。

選者吟

雨しとど寺苑に籠る牡丹の香

北川 栄子

落ちてなほ艶失なはず紅椿

藤田 治夫

校庭を抜ける立夏の風青し

吉永 幸司

俳句は十七文字の世界ですから、多くのことは織り込めません。読み手に想像を委ねるところがたくさんあります。短い言葉からドラマを感じるところが魅力なのです。十七文字に導かれ、作者の感じられたものに共感をしたり、想像が楽しめる作品に魅力を感じて選をいたしました。俳句はあれこれ詰め込まずシンプルにして詩情を醸し出すもの、さらに、「俳句は多作多捨、たくさん詠んでどんどん捨てよ」という教えを受けたことがあります。皆様の更なる精進